アジアでの呼び方 “協同組合”

大谷　正夫

ＩＣＡアジア太平洋協同組合青年セミナーが６月に東京で開催された。アジア１１カ国の代表と日本の参加者を含め，１８０人近い参加者があった。交流を通じて，協同をリードし，協同を志向する２１世紀のリーダーを養成することをねらいとし,活発な論議がくり広げられた。

恐らく，若い人達の“気〃を吸収するようにとの配慮からであったと想像しているが,幸いにもゲストとして,参加するチャンスに恵まれた。

全体会の後に小グループごとに分かれたミーティングでは,参加者の自己紹介と自国での活動紹介，そしてフリー・トーキングに時間がさかれた。

一通り皆の発言が終わると,さて何を交流したら良いのか話題に詰まってしまった。

小生の方から日本の協同組合のほんの概略を説明したが,これでは年寄りが出しゃばり過ぎてしまうことになって良くない。

そこで“協同組合”のことをそれぞれの参加者の国の言葉でなんというかを発表してもらうことにした。

このことを通じて，言葉には，過去の歴史が凝縮して反映していることを,あらためて実感することになった。

インドではサハカリ(Sahkari)というがタイではサハコーン(Sahakorn)というそうである。これは明らかにインド文明の影響である。タイ語にはヒンディと同根のパーリ語起源の言葉が沢山あるそうである。

インドシナ半島という呼称は,まさにインド文明と中華文明の双方からの影響がぶつかり合った半島を意味している。

会合には参加していなかったが，ベトナムは,インドシナ半島では，中華文明の影響を受けた国である。

協同組合はホプ・タク・サ（Hop Tak Xa)であるが，漢字で書けば合作社であり，中国では，ホー・ヅオ・ショと呼ばれる。

マレーシアでは，　マレー語でコーペラシ(Kooperasi)というけれども，インドネシア語でも同様であるとのこと。コープが語根に入っているのはもともと外来語であることは一目瞭然であるが，イギリスとオランダの別々の文化の影響を受けたところが，どのようにして，同じタームを使っているのか，興味のあるところである。

韓国では，日本語と同じく，協同組合と書いてヒョップ・トン・チョ・ハップと発音する。韓国では日本語からの影響で協同組合と使ったと思えるが,これも歴史をさかのぼって調べれば,はっきりするであろう。

フィリッピンでは，コーペラティーバ(kooperatiba）と言うそうである。 明らかに外来語であるが,スペイン語の現地語化したものであろう。

スペイン語では綴りの最後は,-ba ではなく,-va であるからだ。

さて,もともと外来語であれ,なんであれ,その国の確立された言葉は,尊重しなければならない。その協同組合という片言だけでも，その国の言葉で話すことで,良い雰囲気が生まれると思うのである。